

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Changes in synonymous words : On "tiandi (田地)"
"dimian (地面)" "difang (地方)" "dibu (地歩)"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 晴彦, Sato, Haruhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/724

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



同義語の変遷

——“田地”“地面”“地方”“地歩”をめぐって——

佐藤晴彦

はじめに

語彙の歴史的変遷はいくつかの角度から観察できる。同義語の史的变化もそのうちの一つであり、同義語の史的变化に注目していると、その時代その時代の変化を観察することができ、興味深い。

同義語の史的变化を考察する場合、先ず多義語に注目することがより効果的だと思われる。例えば A なら A という語が存在する。その語が A1, A2, A3, A4 という四つの語義があったとしよう。その A1 という語義をもつ語は、普通 A 一つに止まらず、必ず B (もしくは B2), あるいは C (もしくは C3) という同義語が存在するものである。そこで、A1 と B (もしくは B2) や C (もしくは C3) という同義語の消長を考察するのである。こういう方法をとれば、A1 という一語のみを対象とした考察に比し、より一層立体的な同義語の史的变化を記述することができるであろう。

多義語と同義語

1. 多義語

例えば“田地”という語を例にとってみよう。“田地”という語は、

- (1) 「土地, 田畑, 場所」の意
- (2) 「地歩」の意
- (3) 「道のり」(“～里田地”)

(4) 地名+“田地”

という、四つの語義、用法に分けることができるが、それぞれの語義、用法の同義語を考察するということである。

1.1. “田地”

“田地”の(1)「土地、田畑、場所」の意、(2)「地歩」の意、(3)「道のり」(“～里田地”)、(4)地名+“田地”の四つの語義、用法を、それぞれ、田地1、田地2、田地3、田地4とし、幾つかの資料でその頻度を見ると、表Iのようになる。

表I 各資料における“田地”の頻度

	祖堂	朱子	清平	三遂	水滸	古今	警世	醒世	初刻
田地1	0	5	0	1	2	5	4	12	3
田地2	0	(40)	0	0	0	0	0	3	0
田地3	0	0	3	0	2	3	4	3	0
田地4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
二刻	姻縁	紅樓	儒林	兒女	三俠	老殘	七劍	老舍	茅盾
11	1	6	16	0	1	0	3	27	23
1	22	20	5	7	6	7	0	3	8
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

注：数字に()を付したのは、全ての用例ではないという意味。

表Iからおよそ次のような現象が見てとれる。

- (1) “田地1”は各時代にはほぼ使われており、これが現れないのは『祖堂集』『清平山堂話本』『兒女英雄傳』『老殘遊記』の四つの資料だけ。
- (2) “田地2”(=「地歩」)は『朱子語類』で相当数見かけられるが、その後はあまり用いられず、『醒世姻縁傳』『紅樓夢』でピークを迎え、現代ではやや勢力が衰えている。
- (3) “田地3”(=“～里田地”)は『清平山堂話本』から「三言」まで使われているだけで、その前後は一切使われていない。
- (4) “田地4”はこの表では全く現れてこない。

以下、それぞれについて検討を加えてみたい。

1.1.1

(1)はとりあえず対象外とする。

1.1.2

(2)の意味では現代語でも若干使われる。^①

(1) 他要不是这样的人，怎能会落到这步田地？老舍『櫻海集・柳屯的』
（『老舍文集』第8卷）p.209

(2) “我所以恨他，就因为他是使我弄到现在这步田地的第一个坏蛋。”茅盾『腐蚀』（『茅盾全集』5）p.40

(3) “不是，”他睥我一眼，“我不屑隐瞒我的观点，就是落到这步田地也不屑隐瞒，我不喜欢别人占我便宜，也决不占别人的便宜。”王朔『浮出海面』（『王朔文集』1）p.250

ところで、『朱子語類』は用例をすべて検出したわけではないが、それでも40例という、他の資料では見られないほど多量の用例がある。その例。

(4) 最怕如今於眼前道理略理會得些，便自以爲足，更不着力向上去，這如何會到至善田地。(16. 512. 9)^②

『朱子語類』のこの箇所「どうして最高の状態に到達できようか」という意味であろうが、この“田地”の意味は、現代語の“田地”とは若干異なり、かなり実義性を残している。従って全き意味での同義語とは言えないが、現代語の“田地”につながる用法であることは間違いない。

1.1.3

(3)興味あるのは(3)の現象である。今、「三言」の“～里田地”の用例を挙げると、次の通りである。

(5) 迤邐間行了數里田地，雪中見一座花園，但見：… 『古今小説』
(33. 4. a. 5)^③

(6) 行半里田地，到一個土坡上，張媒看着李媒道：“… 同 (33. 8. a. 1)

(7) 王吉接得書，唱了喏，四十五里田地，直到家中。 同 (35. 3. a. 1)

- (8) 隨那小兒，行半里田地看時，金釘朱戶，碧瓦雕樑。『警世通言』
(36. 9. b. 6)
- (9) 若還信脚走到“西川成都府”，一日却是多少里田地！ 同 (37. 1. b. 6)
- (10) 相將到襄陽府，則有得五七里田地。正是：… 同 (37. 13. b. 6)
- (11) 尹宗把一條朴刀趕將來，走了一里田地。 同 (37. 14. b. 7)
- (12) 這鎮在運河之旁，離北京有二百里田地，… 『醒世恒言』 (10. 4. a. 5)
- (13) 行不上一里田地，斜插裡林子中，走出一個和尚來。 同 (27. 23. a. 1)
- (14) 兩個廝趕着，一道正行，行不到三二里田地，… 同 (33. 10. b. 10)

興味あるのは、それぞれの巻の成立推定時期である。今、P. Hanan の説に従って、それぞれの巻の成立推定時期を示すと、以下のようになる。^④

	P. Hanan 説
『古今小説』 33巻	Group A (13c. 末～14c. 初)
同 35巻	Hung
『警世通言』 36巻	Group C (14c. 末～15c. 初)
同 37巻	Group A
『醒世恒言』 10巻	by X
同 27巻	by X
同 33巻	Group C

[注] Group A : 13c. 末～14c. 初 Group C : 14c. 末～15c. 初
Hung : 洪楗
X : Hanan 氏が想定する馮夢龍以外の人物

Hanan 説に基づけば、要するに上の巻はいずれも元代、明初もしくは Hanan 氏が設定する X なる人物の作品だけに使われていることになる。“田地 3” の用法は非常に限られた時期の用法だと推定することが可能である。

1. 1. 4

(4)表 I では全く現れなかった“田地 4” が集中的に使われているのが『新編五代史平話』で、全用例は33例ある。

- (15) 廣明元年正月，沙陀攻忻，代等州，兵逼近晉田地。『唐史平話』卷

上

(16) 偉王在秀容田地里與劉知遠會戰，被劉知遠殺了偉王。『晉史平話』

卷下

『新編五代史平話』は元代の資料と考えられており、「特殊な方言」(呂叔湘)で書かれていると言われている。^⑤“田地3”“田地4”ともに元代を中心に使われて用法とまとめることができるであろう。

1.2 “地方”

“田地”と同様の多義語に“地方”がある。“地方”という語を，“田地”と同じように、

- (1) 「場所」という意味
- (2) 地名+“地方”
- (3) 「地方官」という意味
- (4) 「部分」という意味

という4つの語義，用法に分け，各資料での使われ方を見ると，表Ⅱのようになる。

表Ⅱ 各資料における“地方”の頻度

	祖堂	朱子	清平	三遂	水滸	古今	警世	醒世	初刻
地方1	0	0	1	2	21	25	19	37	30
地方2	0	0	0	0	5	19	17	21	15
地方3	0	0	0	4	2	17	19	37	27
地方4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
二刻	姻縁	紅樓	儒林	兒女	三俠	老殘	七劍	老舍	茅盾
49	48	96	44	156	18	45	56	(636)	25
18	14	2	9	10	2	2	2	(0)	0
35	67	5	16	8	48	0	10	(0)	0
0	0	4	0	14	0	0	0	(151)	0

この表からおよそ次のような現象を見てとれるだろう。

- (1) 「地方官」という意味では『三遂平妖傳』から『七劍十三俠』まで使われ，その前後は見られない。
- (2) 「部分」という語義では『紅樓夢』から使われている。

以下、それぞれについて検討する。

1.2.1

(1)の現象は、“地方”が「地方官」という意味で使われていた明清時代の行政面の反映と考えられる。

(17) 因此地方捉了我，解■（送？）官司。『三遂平妖傳』（7.163.9）^⑥

(2)『紅樓夢』の「部分」という意の“地方”とは、次のような例である。

(18) 王大夫道：“且慢說。等我胗了脈，聽我說了，看是對不對。若有不合的地方，姑娘們再告訴我。”（83.5.b.9）^⑦

(19) 賈母笑道：“你也別怪他，他懂得什麼？看見不好就言語，這倒是他明白的地方，小孩子家不嘴癩脚嫩就好。”（90.4.b.2）

(20) 自以為美，又焉知不是懷着壞心呢？不然，就是他和琴妹妹也有了什麼不對的地方兒，所以設下這個毒法兒。（90.12.b.10）

(21) 賈璉道：“老爺既這麼說，想來芹兒必有不妥當的地方兒。”（93.8.a.10）

ここで興味ある現象が浮かび上がってきた。“地方4”は『紅樓夢』に使われているのであるが、それがすべて後40回に集中しているという事実である。ここから推定できることは、恐らく曹雪芹の時期には“地方”をこうした抽象的な意味では使うということはなく、後40回を加えたとされる高鶚あたりからの言語の反映であろうということである。

ところで、ここで考えるべき問題がある。それは抽象的な意味の“地方”が使われ始めたのが『紅樓夢』の後40回以降であったことは分かったのだが、では、それまでにその意味に相当するものとして何もなかったのか、抽象的な“地方”の出現とともにその概念までが同時に生まれたのかという点である。しかし恐らくそうではなく、それまで何らかの語でその概念を表していたのであろうが、それは一体何であったのかという疑問がもちあがってくる。即座に思いつくのは“之处”であるが、それ以外に“去处”や“所在”も考えられる。今、すべての資料でこの三者の頻度を調査する余裕がないため、

問題となっている『紅樓夢』だけに絞り、三者の頻度を具体的な意味、抽象的な意味に分けて見てみると、次のようになった。

この表から一つ興味あることが指摘できる。それは“所在”が具体的な用法だけで、抽象的な用法がないという点である。

『紅樓夢』における“之处”“去处”“所在”

	之处	去处	所在
具体的	24	7	16
抽象的	30	11	0

(22) 因二人携手出去游頑之時，忽至一个所在，但見荆榛遍地，狼虎同群。

迎面一道黑溪阻路，并無橋梁可通。(5. 16. a. 10)

ということは、“之处”“去处”の抽象的な用法が存在していたところへ、“地方”の具体的な語義から抽象的な語義が派生し、それが入り込んできたということになる。

ところで気になるのは“之处”である。というのは、現代のわれわれの感覚からすれば、“之处”という語は文言であり、到底口語のような感じはしない。しかし紅樓夢の時代はどうだったのであろうか、その時代からすでに現代のような文言として使われていたのであろうか。それを確認するため、簡単な方法として対話部分と地の文に分けて調べてみると、次のようになった。

“之处”の具体的な用法でこそ、対話文より地の文の頻度が勝っているが、抽象的な用法は対話文の方が頻度は高い。さらに“去处”にいたっては、いずれも対話文により多く使われていることが分かる。つまり

“之处”“去处”の『紅樓夢』対話文、地の文における頻度

	之处	去处
具体的	対話文 9	対話文 5
	地の文 15	地の文 2
抽象的	対話文 18	対話文 10
	地の文 12	地の文 1

“之处”という語は、当時にあってはわれわれの現代的な感覚よりも、もっと口語的ではなかったかということが想像できる。

では前80回、後40の違いはなかったのか。調査の結果は以下のようになった。

“之处”“去处”の前80回、後40回それぞれの頻度

	之处		去处	
具体的	対話文	前80回 8 後40回 1	対話文	前80回 4 後40回 1
	地の文	前80回 11 後40回 4	地の文	前80回 1 後40回 1
抽象的	対話文	前80回 14 後40回 4	対話文	前80回 9 後40回 1
	地の文	前80回 12 後40回 0	地の文	前80回 1 後40回 0

ここで注目すべきは，“之处”“去处”の「抽象的用法」の「対話文」における頻度である。

“之处”が14：4，“去处”が9：1と、後40回において、明らかに“去处”の頻度が落ちている。この現象と、先に述べた後40回で“地方”が抽象的な意味として使われ始めたということと因果関係があるのではないか。つまりわれわれは、『紅樓夢』後40回のこの現象から，“去处”から“地方”に交代していく、その萌芽を見てとることができるのではないだろうか。

以上，“田地”と“地方”という二種の多義語の使われ方を検討してきたが、それぞれ興味ある現象を観察することができた。次に、このような多義語のなかから、「地歩」の語義を表す語と、「道のり」の意を表す表現の同義語を考察していくことにしよう。

2. 同 義 語

2.1 「地歩」の同義語

上に述べたように“田地2”は「地歩」の意味であるが、その同義語には“地歩”以外に“天地”がある。三者の頻度を各資料で見ると、表Ⅲのようになる。

表Ⅲからおよそ次のような現象が見てとれるだろう。

- (1) “田地”については既に述べた。

表III

「地歩」の意味を表す語の頻度

	祖堂	朱子	清平	三遂	水滸	古今	警世	醒世	初刻
田地	0	(40)	0	0	0	0	0	3	0
地歩	0	0	1	0	0	1	0	0	3
天地	0	0	0	0	0	0	0	0	0
二刻	姻縁	紅樓	儒林	兒女	三俠	老殘	七劍	老舍	茅盾
1	22	20	5	7	6	7	0	3	8
0	0	0	0	0	0	2	2	28	24
0	0	0	0	0	0	0	0	9	0

注：()を付したのは、資料全部の調査ができていないという意味。

(2) 現代語で用いられている“地歩”は、元明期ではほとんど稀であり、『清平山堂話本』『古今小説』『初刻拍案驚奇』の三種のみ。あとは清末に若干の例が見えるだけ。

(3) “天地”という語が老舍にだけに見られ、注目される。

以下、それぞれの点について検討してみよう。

2.1.1

既に述べたので省略する。

2.1.2

(2)元明期の“地歩”の例としては、

(23) 阮三見張遠參到八九分的地歩，況兼是心腹朋友，… 『古今小説』

(4.6.a.7)

という例を挙げるができる。ところがこの巻は『清平山堂話本』の「戒指兒記」をベースにした作品である。従って、結局『清平』で1とあるものと同じ例だということとなり、元明期の用例は更に少なくなる。以上のことを考えると、現代で一般に用いられる“地歩”は、むしろ現代になって普及したと理解する方が事実合っていると思われる。

2.1.3

(3)老舍だけに“天地”で「地歩」の意を表す用例が見られるが、あるイン

フォーマントによると、北京では“田地”の“田”は“天”のように発音するという。老舎の“天地”はその忠実な表記であるのかも知れない。

(24) 刘四爷更没想到事情会弄到了这步天地。『骆驼样子』14 (『老舎文集』3) p.131

(25) 他不能明白他怎么会落到这步天地。『四世同堂』77 (『老舎文集』6) p.96

2.1.4

ところで現代語における“田地”の量詞は、“想不到他会落到这步田地”の如く“步”を用いるのが一般的である。しかし、表Ⅲで“田地”が使われている資料を注意して見てみると、『醒世姻縁傳』までは量詞として“步”が使われることがないことに気づく。“田地”の前に指示詞があっても量詞がないことが多く、量詞が使われる場合は“個”に限られ、その他の修飾語としては“這等”があるのみで、“步”が使われるのは『紅樓夢』以降になるのである。

(26) “暖！你是個好人家子息，怎麼到這等田地？ 『醒世恒言』(17.21. b.8)^⑧

(27) 人到了這個田地，也怪不得他恨地怨天，呪生望死，… 『醒世姻縁傳』(32.2. a.9)

(28) 薛蟠一見說：“暖哟，可是我怎麼就糊塗到這步田地了！…” 『紅樓夢』(67.3. b.2)

今、この関係をより明確にするため、『醒世姻縁傳』以降の“田地”と“步”の共起関係を示すと、以下のようなになる。

	醒世	紅樓	儒林	兒女	三俠	老殘	七劍	老舎	茅盾
步	0	10	1	7	3	5	0	3	8
田地	22	20	5	7	6	7	0	3	8

『紅樓夢』以降，“田地”と“步”の相性がよくなり、現代では両者の親密度がほぼ定着した感がある。しかしこの傾向は僅か『紅樓夢』の時期から始

まったくすぎないのである。

2.2 「道のり」の意を表す同義語

“～里 X”を用いて道のりを表す語の頻度を一覧にすると、表Ⅳのようになる。

表Ⅳ 「道のり」の意を表す同義語

	祖堂	朱子	清平	三遂	水滸	古今	警世	醒世	初刻
里田地	0	0	6	0	2	3	4	3	0
里地	2	4	1	0	2	1	4	0	1
里路	0	1	4	8	30	3	2	3	6
二刻	姻縁	紅樓	儒林	兒女	三俠	老殘	七劍	老舍	茅盾
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	19	3	1	12	4	13	0	31	2
8	30	1	27	2	7	5	8	34	23

表Ⅳからおよそ次のような現象を見てとれる。

- (1) “～里田地”が『清平山堂話本』など限られた資料にしか見えない。
- (2) “～里地／～里路”はほぼ各時代を通じて使われている。“～里地”は『兒女英雄傳』『老殘遊記』など北方の作品に，“～里路”は『水滸傳』『二拍』『儒林外史』や茅盾など南方の作品、作家に使われる傾向がある。
- (3) その中で老舍の“～里地／～里路”が拮抗しているのが注目される。

以下、それぞれについて検討する。

2.2.1

(1) “～里田地”が元代という限られた時期を中心に使われたということについては、既に述べた。

2.2.2

(2) “～里地”が主として北方で，“～里路”が主として南方で使われる傾向にあるが、それでも『醒世姻縁傳』『三俠五義』など、両者とも使われているのには何らかの理由があるのだろうか。例えば地域的な原因、あるいは登場人物の出自による原因など。今後の検討課題となる。

2.2.3

(3)とりわけ老舎の“～里地：里路”／31：34というのはほとんど量的には差がない。これは一体どう解釈すべきなのか。恐らく老舎の解放前と解放後における言語的变化と関係があると思われるが、今後の課題としておきたい。

ま と め

以上述べてきたことをまとめると、次のようになる。

- (1) “田地 3” (=“～里田地”) 及び “田地 4” (地名+“田地”)の二者は、元代を中心として行われた用法であった。
- (2) “～里地／～里路”はおおむね北方／南方という地域差があったらしい。
- (3) “田地 2” (=「地步」) の使用頻度は『醒世姻縁傳』『紅樓夢』をピークとし、現代では勢力が衰えてきている。
- (4) “田地 2” に対する量詞として“步”が使われるようになったのは『紅樓夢』以降である。
- (5) やや抽象的な意味で使われる“地方” (=「部分」)の用法は、『紅樓夢』に始まる。しかも後40回でしか使われていない。曹雪芹の頃にはこの用法はなかったらしい。
- (6) “地方” に抽象的な用法が生まれるまでは“之处”“去处”が、とりわけ“去处”がその用法を担っていたらしい。または当時において“之处”は口語としても使われ、今日ほどの文言らしさはなかったらしい。
- (7) “田地 4” は現在確認できた限りでは、『新編五代史平話』にしか使われていない。

このように、一見何でもないような語彙でも、歴史的文献を調査すれば、ある語はある一定の時期に使われたこと、またある語は地域的な違いがあることなどが分かってくる。こうした語彙の変遷は、ある一つの語が使われて

いる中で、次の同義語が生成し、平行して行われ、そしてすたれていく。それはあたかも布を織りなすように、互いに絡み合い、複雑な様相を呈しているが、そういう中でも、すこし注意すれば、新たな語義の発生や新たな用法の発生を発見し、語彙変遷のダイナミズムを感得でき、興味が尽きない。

小論で扱った問題に類するものは、佐藤晴彦1983及び1984で論じたことがある。しかし当時収集した用例はまだまだ不十分であったから、いきおい結論も十分自信がもてるものではなかった。今日、大量の資料が短時間で処理できる環境に恵まれたのを機会に、自身の論にもう一度検討を加えてみて検証することにした。結果は拙論に誤りがなかったことを確認できた。残された課題は、ではこうした語彙群変遷過程が、他の変遷過程をたどらず、何故現に歴史にある「この変化」をしてきたのか、その必然性は何であったのかという、これまでの研究が解決できていない問題を解決することである。

注

- ① 小論はデータベースを利用したが、全面的に信頼するわけにはいかないので、挙げる用例はテキストにより確認した。使用したテキストはそれぞれ以下の通り。
老舍『老舍文集』人民文学出版社、1985年
茅盾『茅盾全集』5・小説五集、人民文学出版社、1984年
王朔『王朔文集1 純情卷』华艺出版社、1992年10月、第二版
- ② 数字はテキスト(『朱子語類』臺灣正中書局、1973年12月臺三版)の「巻数、頁数、行数」を表す。
- ③ 数字はテキスト(『三言』臺灣世界書局、1959年4月)の「巻数、葉数、表裏、行数」を表す。
- ④ Patrick Hanan 1973 参照
- ⑤ 呂叔湘1954, p.179
- ⑥ 数字はテキスト(天理図書館善本叢書漢籍之部第十二卷『三遂平妖傳』八木書店、1981年5月)の回数、頁数、行数を表す。■は墨丁。
- ⑦ 数字はテキスト(紅樓夢叢書『王希廉評本新鐫全部繡像紅樓夢』廣文書局、1977年)の「回数、葉数、表裏、行数」を表す。
- ⑧ 数字はテキスト(『重訂醒世姻縁傳』同徳堂梓、文学古籍刊行社1987年影印本)の巻数、葉数、表裏、行数を示す。

参考文献

呂 叔湘 1954『漢語語法論文集』科学出版社

P.Hanan 1973 *The Chinese Short Story, Studies in Dating, Authorship, and Composition*, Harvard University Press

佐藤晴彦 1983「宋元語法史試論——<～田地><～里路><田地><地面> をめぐって——」『神戸外大論叢』第34巻第3号

—— 1984「元明語法史試論——<～田地><～里路><田地><地面> をめぐって——」『神戸外大論叢』第35巻第2号